

2010年11月17日

コンプライアンス・CSRレポート
(2010年度 上半期)

関西テレビ放送株式会社

目次

第1	はじめに	(1)
第2	2010年度上半期(4月~9月)の経過	(2)
第3	番組制作等について各部門の取り組み	(4)
	(1) 放送倫理会議の活動	(4)
	(2) 「S-コンセプト」他、本社番組制作部門の取り組み	(5)
	(3) 東京編成制作部門(東京コンテンツセンター)の取り組み	(7)
	(4) 報道部門の取り組み	(8)
	(5) スポーツ部門の取り組み	(10)
	(6) メディア戦略部門の取り組み	(11)
	(7) ライツ関連部門の取り組み	(12)
	(8) 技術部門の取り組み	(14)
	(9) 営業部門の取り組み	(16)
	(10) イベント開催部門の取り組み	(17)
	(11) 番組審議会の活動	(17)
第4	視聴者の皆様とのつながりやメディアリテラシー活動	(20)
	(1) オンブズ・カンテレ委員会の活動	(20)
	(2) 視聴者の皆様からのお問い合わせ等への対応状況と 「月刊カンテレ批評」	(22)
	(3) メディアリテラシー推進活動の現状	(25)
	(4) 環境対策等の活動について	(27)
	(5) 会見、ホームページ等、企業情報の開示状況	(28)
第5	コンプライアンス態勢の構築	(30)
	(1) リスクマネジメント態勢等の確立について	(30)
	(2) 情報セキュリティ態勢について	(31)

	(3) コンプライアンス・ラインの運用について	(3 1)
第 6	経営機構等について	(3 2)
	(1) 機構改革と改革推進本部の状況について	(3 2)
	(2) 関係会社とグループ政策について	(3 2)
第 7	放送人倫理の確立に向けた 教育・研修等	(3 4)
第 8	おわりに	(3 5)

第1 はじめに

今日、放送をはじめメディアを取り巻く環境は目まぐるしく変化しています。また、政治や経済情勢、さらには緊張感高まる国際関係を含め、日本を取り巻く環境も不安定な状態が続いています。そのような中、当社がマスメディアの企業として、社会に向けてどのような活動を行ってきたのかについて、2010年4月から9月にいたる半年間の詳細を本レポートを通じまして、視聴者をはじめとします皆様にご報告いたします。

当社では、2007年に発生しました「発掘！あるある大事典Ⅱ」捏造問題以降、経営機構改革や内部統制システムの充実をはじめ、番組制作現場ならびに放送関連部門での様々な機構改革を実施してきました。

また、2008年秋からの世界的な景気後退により放送収入が減少する中、当社も収入源の開拓や経費の節減のため、番組制作費の見直しなど様々な課題に取り組んで参りました。しかし、それにより放送番組の質や視聴者の皆様へのサービス低下を招くことのないように、さらなる努力を重ねてきました。

そして現在当社では「エリアで最も必要とされる“コンテンツ・メーカー”」ならびに「ライフラインとして信頼されるテレビ局」を目指し、放送人としての倫理の向上などを、役員ならびに社員が日々心がけています。また、経営資源を本業である放送事業へ集中させるとともに、番組の更なる質的向上にも取り組んでいます。

本レポートは、当社のそれら具体的な取り組みを視聴者の皆様方にご覧いただきたく、社内すべての担当セクションがそれぞれ執筆し、その活動状況の詳細を報告するものです。そして、皆様方の当社へのご理解が少しでも深まる手助けになれば幸いです。

第2 2010年度上半期（4月～9月）の経過

- 4月 1日（木） 新卒社員13名入社
ソーラー発電付自販機設置
- 4月 6日（火） 関西大学社会学部の「マスコミ制作実習」講義開始
- 4月 8日（木） 新入社員に対し、コンプライアンス関連研修
- 4月14日（水） 第19回放送倫理・コンプライアンス研修会「カンテレブランドの維持と内部統制」（山口利昭 講師）
- 4月19日（月） USBメモリー等取扱のセキュリティ強化実施
- 4月23日（金） オンブズ・カンテレ委員会 第4回会合
オンブズ・カンテレ委員会特選賞 番組部門「ザ・ドキュメント 父の国 母の国 -ある残留孤児の66年-」
イベントその他活動部門「アナウンサー朗読会」に決定
- 4月26日（月） 立命館大学産業社会学部との2010年度共同研究「テレビとは何か、原点としてのテレビを考える」開始
- 5月 2日（日） 「冒険 キッズパーク」開催（4日まで）
- 5月 6日（木） ドキュメンタリー「あの日の僕に出会えたら」ギャラクシー
奨励賞受賞
- 5月26日（水） 屋上テラス 緑化で、サツマイモ、ゴーヤを栽培
- 5月27日（木） 「ダイヤモンドカップゴルフ2010」チャリティー
(30日まで)
- 5月28日（金） 決算取締役会開催、全体会議開催
決算取締役会の報告社長記者会見
「コンプライアンス・CSRレポート（2009年度）」を発表
- 6月 1日（火） 人事異動及び機構改革
編成制作局東京コンテンツセンターの組織を改革
「クールビズ」実施（9月30日まで）
- 6月 4日（金） 第4回リスクマネジメント会議開催
- 6月 7日（月） メディアリテラシー 寝屋川市の中学校へ社員を講師派遣
- 6月16日（水） 阪急百貨店にて「よ～いドン！ 食覧会」開催（22日まで）
- 6月21日（月） 「CO2ライトダウンキャンペーン」照明など消灯（7月7日も）
- 6月25日（金） 第69回定時株主総会
会長、社長、専務1名、常務3名他重任
- 6月26日（土） キンダーフェスティバル 開催
- 6月27日（日） 3000人の吹奏楽 開催

- 7月 7日 (水) 心でつながるPJチーム 新メンバーでの初会合
- 7月 8日 (木) 第52期委員による番組審議会スタート
- 7月 9日 (金) 個人情報保護 社内講習会 開催
- 7月13日 (火) メディアリテラシー 堺市の中学校へ社員を講師派遣
メディアリテラシー 高校生によるドキュメンタリー制作
支援開始
- 7月14日 (水) 第2回コンプライアンス委員会開催
- 7月16日 (金) 第5回 オンブズ・カンテレ委員会 開催
- 7月18日 (日) S-コンセプト「スッキリ！グッスリ！ ココロとカラダの
快適学」放送
- 8月 1日 (日) 親子サイエンスフェア 開催
- 8月 5日 (木) 夏季社長定例記者会見
- 8月 7日 (土) 社屋内アトリウムで「88まつり」開催（8日まで）
- 8月28日 (土) 「第9回アナウンサー朗読会」開催
- 9月 7日 (火) メディアリテラシー 富田林市の中学校へ社員を講師派遣
- 9月10日 (金) 10月改編記者発表会を開催
メディアリテラシー 寝屋川市の大学へ社員を講師派遣
- 9月14日 (火) メディアリテラシー 大阪市の小学校へ社員を講師派遣
- 9月25日 (土) S-コンセプト「オサカナと食卓の科学」放送
- 9月28日 (火) A C A P 創立30周年 記念シンポジウムに担当者参加
- 9月30日 (木) 地上デジタル中継局109局へ、放送エリアのデジタル
カバー率約97%に

第3 番組制作等について各部門の取り組み

(1) 放送倫理会議の活動

2009年6月に「放送倫理部会」が改組されて発足した「放送倫理会議」は、2010年度も引き続き毎月1回開催され、コンプライアンス担当取締役を座長に、編成制作局、報道局、スポーツ局など番組制作部局の責任者に加え、営業局、ライセンス開発局、メディア戦略局など番組に間接的にかかわる部局の責任者も出席して、番組および放送全般の倫理にかかわる課題を討議しています。

また、放送倫理会議は当社の番組審議会審議事項、ならびに独自の第三者委員会であるオンブズ・カンテレ委員会の討議内容、そして社外からの声として、視聴者の皆様からのご意見や苦情、さらには、日本民間放送連盟や、放送倫理・番組向上機構（BPO）の決定などを社内に周知させる場としても機能しています。

そのような中、今後の課題として、放送倫理会議における討議内容を広く社内に浸透させるための方策を現在検討しています。

以下、2010年度上半期に6回開催されました放送倫理会議の主な内容を記します。

*第11回（4月13日）

- ・メンバーが不祥事を起こしたため放送を自粛していたプロレス団体について、スポーツ部から現状の分析と放送再開の方針について説明がありました。
- ・いわゆる「TBSブラックノート事件」に対するBPOの意見書ならびに、BPOの「バラエティ番組に対する意見書」を受けフジテレビが制作した番組「悪いのはみんな萩本欽一である」について検討を加えました。

*第12回（5月17日）

- ・オンブズ・カンテレ委員会による特選賞番組部門に「父の国 母の国 ―ある残留孤児の66年―」、イベント部門にアナウンサー朗読会が選ばれたことが報告されました。
- ・報道部局担当者から、大阪府知事の取材、番組出演に関して、知事としての立場と政治団体の代表としての立場の区別が難しく、慎重な判断が必要であることが指摘されました。
- ・ビデオパッケージとして制作し、放送の可能性も考えられる自衛隊を取材対象とした企画に関し、担当部署から説明がありました。それに対し、安直な自衛隊の宣伝にならないよう、また自衛隊以外も取材して、シリーズ全体として片寄った作品にならないようにすることなどの意見が寄せられました。

*第13回（6月15日）

- ・番組審議会委員の交代について事務局より報告と説明がありました。

- ・週刊誌でとばく疑惑が報じられた力士が出演していた収録済みバラエティ番組の取り扱いについて議論がありました。疑惑のみの段階であえて出演部分をカットするべきではないとしてそのまま放送した判断、その後、警察の捜査などによって事実が確かめられたのち、番組販売用素材について再編集を行った経緯の説明がありました。
- ・その他トーク番組における出演者の「過労死」発言、情報番組での外国取材などの事例について検討を行いました。

*第14回（7月13日）

- ・10月に初めて大阪で開催されることになった、BPO放送倫理検証委員会と民放との意見交換会について、民放連の考査事例研究部会と放送の自立に関する専門部会の新しい枠組みについての説明がありました。
- ・番組内で電子レンジでの卵の調理紹介を見て、自宅で同じように調理してやけどをしたという視聴者からのメールについて、放送に至った経緯を検証するとともに、以前の事例の再検討も含めて、改めて注意を喚起しました。

*第15回（8月30日）

- ・視聴者から寄せられた、放送画面のレターボックス化に伴って、一部アナログテレビに備わっている自動で画面のサイズを変更するシステムによって、気象警報などのスーパーが読み取れなくなるという指摘について、対応の必要性、技術的可能性を論議しました。
- ・ニュース番組に出演した元国会議員の発言内容に対して、政治ジャーナリストが事実と異なるとネット上で抗議、反論を行った件について、内容の訂正の是非、その方法、放送法に規定される訂正放送との関係などを検討しました。

*第16回（9月21日）

- ・新番組のドラマの番組宣伝スポットに関し、視聴者から「気分が悪くなった。サブリミナル要素を含んでいるのではないか」との指摘があったことに対して、サブリミナル効果があるものではないが、一部映像が見る人に対し刺激が強すぎる恐れもあったため、編集し直して放送した経緯を担当者から報告を受け、検討を行いました。
- ・バラエティ番組で条例によって禁止されている料理を提供する飲食店を紹介した件について、番組内、当社ホームページ上でのおわびなどの対策、問題が起こった要因、再発防止策などについて論議しました。

（2） 「S-コンセプト」他、本社番組制作部門の取り組み

1) 番組全般について

番組の編成、制作部門では視聴者の皆様の幅広い要望にお応えするため、様々なジャンルの番組を制作、編成するよう務めています。

プライムタイム（19時～23時）に4つのタイトルをラインナップしているドラマでは、社会派からラブストーリー、サスペンスと多様な内容でお楽しみいただいています。

火曜日22時は当社制作で、4月から6月は、救命救急の現場を舞台にその過酷な現状と、生きることの素晴らしさを訴えかけた「チームバチスタ2 ジェネラルルージュの凱旋」を、また、7月からは、冤罪を晴らすためにひたすら逃亡する若き弁護士を通して、法律や法曹界に一石を投じたサスペンス「逃亡弁護士」を放送し好評を博しました。

一方、バラエティ番組では「世間の裏側のぞき見バラエティ ウラマヨ！」が、4月から土曜日の午後で始まり、人気絶頂のブラックマヨネーズの軽妙な司会が人気を呼んでいます。また、土曜日の夕方には、雨上がり決死隊がホストを勤め、お招きしたゲストの食にまつわるトークを展開する「雨上がり食楽部」も始まりました。

また当社では、関西に根をおろしたテレビ局としてエリアの情報を発信する番組の制作は、非常に大切であると考えています。月曜日～金曜日の午前に放送中の「よ～いドン！」は、関西各地の街やそこに住む人々の何げない日常を訪ね歩くコーナーを中心に、ますます好評を博しています。

さらに、夕方のニュース番組「スーパーニュースアンカー」も、曜日毎に多才なコメンテーターを迎え、全国のニュースはもちろん、関西を中心にしたエリアのニュースも独自の視点でお届けしています。

2) 「S-コンセプト」について

「健康」「体」「科学」にまつわる素朴な疑問や関心を、科学的な目線で正確にわかりやすく紹介する「S-コンセプト」シリーズは、2007年にスタートして以来、合計16作品を制作してきました。

2010年度上半期では、まず「睡眠の悩み」「ストレスと癒しの科学」「快適な夏の暮らし」の3つのテーマをそれぞれ専門家の解説や最新の実験をまじえて分かりやすく科学的に解説した「スッキリ！グッスリ！心と体の快適学」を7月に放送しました。

そして9月には、魚食大国・日本と深く関わる『食料』としての魚介類の現状を多方面から科学的見地で分析し、楽しく興味深く紹介した「オサカナと食卓の科学」を放送しました。

当社では「視聴者の皆様の健康で豊かな生活に役立つ」という視点を意識しながら、今後も「S-コンセプト」の制作にあたっていきます。

(3) 東京編成制作部門（東京コンテンツセンター）の取り組み

2009年6月の機構改革時に「東京コンテンツセンター」という名称になり、編成、制作、コンテンツの3部署の構成で活動してきました。そして、2010年6月にコンテンツ業務推進部が加わり、主に法務・著作権の業務を担っていくことになりました。以下に各部の番組のコンテンツ化、マルチユース化の取り組み等、状況を記します。

1) 編成部

政局や社会的関心時についての特別番組編成や放送内容の変更などが発生しましたが、本社編成部と連携し、エリアの視聴者の不利益にならないように、また、放送事故が起きないように、当社の営業的な利益の確保、コンプライアンスなどを念頭におき、フジテレビはじめ系列各局との編成・ネットワーク調整を行いました。

7月クールドラマ「逃亡弁護士」では、ドラマとして当社初となる見逃し動画配信を実施しました。今後も番組制作時には、動画配信やライセンス展開等を念頭においた取り組みが行われていきますが、編成部では社内各所や系列各局等との調整を行っていきます。

番組宣伝では、新聞や雑誌など媒体各社と交渉し、広告掲出や記事での取り上げ等をレギュラー番組や単発番組で随時実施したほか、新たな広告展開の模索も行っています。

2) 制作部

制作部では、火曜22時の全国ネット・ドラマ枠を引き続き担当しています。4月クールは「チーム・バチスタ2 ジェネラル・ルージュの凱旋」の制作をメディアミックス・ジャパンに委託(放送権譲渡契約)し、当社はプロデューサー1名、ディレクター1名が参画しました。現在の医療問題を背景にした上質のサスペンスドラマとして視聴者に好評でした。

また、7月クールは「逃亡弁護士」の制作をホリプロに委託(放送権譲渡契約)し、当社はプロデューサー1名、ディレクター1名が参画しました。今回は、29歳の若手プロデューサーを起用し、次世代を担う人材育成にも努めました。自社制作だけでなく、委託制作の場合も、当社社員が積極的に制作に参画し、企画から放送までイニシアティブを取りながら、コンプライアンスを遵守してきました。

この他に、「くらべる世界の新勢力図」(8月放送)や「芸均点」(9月放送)などの全国ネットのバラエティー番組を月1本制作するなど、新たなバラエティー番組を企画開発しています。

3) コンテンツ事業部

まず映画事業についてですが、今期も「のだめカンタービレ最終章・後編」、「矢島美容室 THE MOVIE～夢をつかまネバダ～」、「座頭市 THE LAST」、「THE LAST MESSAGE 海猿」と多くの系列出資映画を手掛けています。

また、来年1月公開の「僕と妻の1778の物語」は、当社が制作した草薙剛さん主

演の「僕生き」シリーズのドラマの集大成ともいうべき作品で、当社プロデューサーが参加して、フジテレビと共に映画製作に当たりました。

さらに、映画「阪急電車」は有川浩さんの小説の映画化ですが、当社では「阪急電車」という地域性から是非取り組むべき作品であると判断し、製作プロデューサーが原作の映画化権確保から取り組み、製作にこぎつけ、当部からも1名プロデューサーが参加して製作に当たっています。

なお、この作品については、関西初の試みとして、製作に賛同をいただいた読売テレビとのコラボレーション（出資・宣伝面等）も実現しています。

一方、ライツ関連事業については、全国ネットドラマのDVD化に加え、関西ローカルの深夜ドラマ「誰も知らない」学園の制作およびDVD化に1名プロデューサーが参加しました。また、2年目となった「ギャル・ネクスト・ラボ」は、プロデュース商品を販売する関西テレビハズが、新たな流通経路を模索したことによって、より多くの視聴者にこの番組ならびにプロデュースした商品が認知されるに至りました。

また、メディア関係については、「逃亡弁護士」で当社初の見逃し配信に組み込み、タレント事務所の対応や配信用素材の編集・MA等の業務に当たりました。このように視聴者の方のために、今後も連続ドラマの見逃し配信サービスを提供するとともに過去の作品等も配信で見ただけのよう取り組んでいきます。

4) コンテンツ業務推進部

2010年6月に新設されたコンテンツ業務推進部は、東京コンテンツセンターの各部署と本社の著作権業務部、コンプライアンス推進部（法務担当）の橋渡し、センター内のコンプライアンス態勢の推進などを担当しています。3ヵ月足らずと短い期間ではありますが、番組及びコンテンツ関係の契約締結の補助の他に、本社と並行して個人情報保護に関する説明会を開催するなど、コンプライアンス態勢作りを行っています。

(4) 報道部門の取り組み

2010年度上半期は、政権交代後初の本格的国政選挙となる参議院議員選挙を軸に、政治・政局の話題がニュースの中心を占めました。沖縄の普天間基地の移転問題に端を発し、鳩山首相、小沢幹事長が辞任。その後菅内閣が発足し、参院選挙での民主党の惨敗へ。そして再度の民主党代表選挙から組閣へと政局はめまぐるしく動き続けました。

当社の「スーパーニュースアンカー」では、東京発のニュースに加え、番組独自で政治家や専門家をスタジオ等に招き、レギュラーコメンテーターの解説を加えるなど、エリアの視聴者向けに独自の情報をわかりやすくお伝えしてきました。

一方で、政局の動きだけではなく、子育て支援、医療問題、経済格差問題、沖縄問題などなど、私たちが直面している問題を国民、市民の視点に立って、取材し特集として

放送しています。政局をながめるばかりでなく、身近な問題と政治との距離を埋めることが地域に密着するローカル局としての大きな役割だと考えています。

7月4日の参院選挙の開票速報番組は、「スーパーニュースアンカー」のキャスター、コメンテーターを軸に構成し、エリアの視聴者の皆様に対して、迅速で正確な情報をわかりやすくお伝えすることに尽力しました。事前の世論調査、投票日当日の出口調査や各市町村の投票所から直接票を取り込み、どこよりも早く、分かりやすい速報番組を心がけました。

政治以外のニュースでは、9月には裁判で大きなニュースがありました。大阪地検に逮捕、起訴され、虚偽有印公文書作成・同行使の罪に問われた厚生労働省の元局長に対し、大阪地方裁判所から無罪の判決が言い渡され、大きな注目を集めました。その後もこの捜査の過程で検察官が証拠隠滅の疑いで逮捕されるなど検察の存在意義そのものを問う出来事にまで発展しました。当社では、判決の当日だけでなく、判決に至るまでの公判の様子をつぶさに報道し、裁判のあり方や検察のあり方を問う特集も放送しました。

日々のニュース以外でも前年度より継続的に取材を続け、大きな反響を呼んだ「食物アレルギー」についての取材を今年度も継続し、特集として放送し続けています。

一方、ドキュメンタリー番組では、4月にはJR福知山線の事故から5年を経て、JR西日本側が事故後どのように被害者と向き合い、社内で何をしてきたかを取材、放送いたしました。また8月には、戦時中にある仏教の寺院が檀家に向けて発行した文書を元に、仏教がどのように戦争と関わってきたのかを見つめる番組を制作いたしました。過去の出来事を風化させることなく、教訓を読み取って今に生かして行くことも報道の大きな役割の一つだと考えます。

ところで、2010年度上半期は、局地的豪雨、記録的な暑さなど日本を取り巻く気象状況は異常なものでした。そんな中、気象情報、災害情報などをお伝えすることも私たちが最も力を入れているものの一つです。

気象庁は5月から気象警報、注意報を従来の「地域別」から市区町村単位の発表に切り替えました。しかし「市町村」単位での情報提供は、テレビの速報でお伝えするにはあまりにも時間がかかり過ぎ、却ってわかりにくくなると当社では判断をしました。このため速報は従来と同様に地域単位とする一方で、更に詳細な情報を必要とされる視聴者の方のために、地上デジタル放送のデータ放送で市町村単位の情報を掲載することにしました。

2011年7月にアナログ放送が終了することから、報道関連でもHD化の作業を順次進めています。例えば7月からは天気予報の画面をHD化し、より見やすく、多くの情報をお送りできるようになりました。また空からの映像もHD化するべく新型のヘリコプターを導入、下半期早々にはHD化された映像をお届けできるようになっています。さらに災害情報や天気情報を即時に伝えるため、各地の映像を生でお届けする「お天気

カメラ」のHD化も順次進めています。

(5) スポーツ部門の取り組み

スポーツ局では2010年度上半期も、より良質で視聴者の皆様に楽しんでもらえる番組の制作・放送に努めました。スポーツのもつ感動、感激をよりリアルに伝えることで、スポーツ文化、またテレビ放送文化の発展にも貢献できるように努力しました。

また、関西に縁のあるスポーツ選手にスポットを当て、地元のスポーツ文化の発展ということも特に意識をしました。

1) 野球関連

今期は阪神タイガース、オリックス・バファローズのホームゲーム、アウェイの公式戦21試合(うち1試合は雨天中止)を放送しました。特に阪神タイガースの中継については、人気の巨人戦を昨年より1本多い3本放送しました。

また野球ファンの開拓など、より多くの視聴者の皆様に野球中継に興味をもってもらうと、開幕前には解説者らのシーズン前の順位予想などの番組を制作し、面白く紹介しました。

さらに8月1日には「レジェンド ～清原和博×野茂英雄 甦る平成の名勝負～」を放送し、引退後初めて出会う二人が今だから話せる本音の対談などを紹介しました。思い出に残る名シーンなども盛り込み、野球ファンにとっては永久保存版と言えるような番組となりました。

2) 競馬関連

今期も桜花賞、天皇賞、宝塚記念などのGIレースを中心に「競馬beat」を放送しました。また、土曜深夜の予想を中心にした「サタうま!」では、競馬の固定ファンのさらなる開拓と、新規のファン発掘を考えて、いろいろな企画を練りました。

また「ウオッカ～奇跡への疾走 最強牝馬のすべて」をDVD化しました。全26レースのノーカット版で、ファンに存分に楽しんでもらえたものと思います。

さらに、競馬ファンに惜しまれつつ亡くなった名馬・オグリキャップ特集を8月1日の深夜に「芦毛の怪物 オグリキャップ」と題して制作、放送しました。

3) 単発関連

今年2月のバンクーバー冬季五輪で日本のフィギュア界の選手が大活躍をしましたが、4月5日にこの五輪出場選手が登場するエキシビジョンマッチを収録して放送しました。

このエキシビジョンマッチは視聴者の皆様からの要望も多くあり、5月に完全版として再放送しました。

また5月には、「ダイヤモンドカップゴルフ2010」を放送し、石川遼選手をはじめ10代、20代の若手の活躍も余すところなく映し出し、ゴルフの新しい時代到来の

印象をより強く描き出し、ファンの一層の興味に応えました。

一方、関西に馴染みや縁のあるスポーツ選手を取り上げる「感謝×感激×雨上がり！関西最強アスリートウラもオモテも大紹介」を9月に放送し、あまり知られていなかった関西に縁のあるアスリート達を紹介しました。

また、実験的な企画として、スポーツに縁のないお笑い芸人が、ワールドカップサッカー日本対カメルーン戦の試合中に、敵地カメルーンから日本を応援する番組を放送し、スポーツにあまり興味のなかった視聴者も惹きつけることができたのではないかと思います。

さらに実験としては、プロレス「ドラゴンゲート」のスタジオマッチを当社で開催し、3Dカメラでの収録を行い、来たるべき立体映像時代への布石も打つことができました。

以上のように2010年度上半期も、良質かつ地元関西の視聴者の皆様に喜んでもらえる番組作りを続けてきました。また、番組の制作チェック態勢の徹底を図り、迅速な情報伝達やスタッフ相互間の情報交換もより細かく出来るようにしています。下半期におきましても引き続き、スポーツ文化の発展に役立っていけるよう努力していきます。

(6) メディア戦略部門の取り組み

2009年6月の機構改革以降、従来のクロスメディア事業局のうちインターネットや携帯、ワンセグ等を中心としたメディア事業部門と、それまで経営企画局に属していたナレッジキャピタル推進部門が、新たにメディア戦略局として業務をスタートして1年あまりが経ちました。

そのような状況下、2010年度上半期においてはまず、メディア事業部の柱である携帯サービス事業「ケータイ DE カンテール」での新規会員サービスが支持され、会員増に繋がりました。また、前期から準備を整えていました携帯端末画面の「着せかえサービス」も、上半期で3キャリア（NTTドコモ、au、SoftBank）全てで対応可能となりました。

そして、動画配信事業では、7月から火曜日22時に全国ネットで放送されたドラマ「逃亡弁護士」の有料見逃し配信を在阪局として初めて実施しました。さらにこの作品は、ATP作品で初めての有料見逃し配信作品となりました。また、同時期に過去の火曜日ドラマ2作品の有料アーカイブ動画配信を実施しました。一方、ローカル番組では深夜の番組「ヘブンズ・ロック」を最短で放送終了後すぐに動画配信するなど、コンテンツ強化に努めています。

さらにデータ放送事業では、別項でも紹介しましたゴールデンウィーク中の特別番組と連動する「冒険キッズパーク」企画に参画し、番組連動データによる展開を実施しました。

一方、ナレッジキャピタル推進部では、今期もメディアアートのクリエイターを発掘する「BACA-JA」開催に向け進めており、全国の学校から、合計159作品の応募を受け、その中から“映像部門”では最優秀作品、優秀作品を“ネットワーク部門”からは優秀作品を選出しました。

これらは、下半期にweb上で発表し、上映会を行う予定です。また、webでメディアアート情報を発信する番組「KTV NEW MEDIA LAB」では、「アルスエレクトロニカ」（以下ARS）のディレクターが来日した際のインタビューや、同社の賞を獲得した日本人アーティストの紹介などを行っています。

また、「BACA-JA」やメディアアートをより理解していただくため、9月にオーストリアで行われたARSフェスティバルの様相や、日本でのアートイベントを取材し、番組を制作しています。この番組は「BACA-JA」の受賞作品紹介と共に、下半期に放送する予定です。

それらと並行して、メディアアートを根付かせるために、当社スタジオに於いて企業向けのプレゼンテーションを行いました。これらを通じてアーティストの自立を助け、よりメディアアートが振興するよう目指します。

メディア戦略局では、2010年度においても、これまで記載しましたようなインターネット事業等の実施に関する社内規程等の遵守をはかるとともに、様々な権利関係を適切に処理し、契約書などの作成も関連各部署との緊密な協議を重ねて遺漏のないチェックを行っています。

またweb、携帯を通じて取得する個人情報の管理については、各担当者が適切に管理できるようなシステムを導入しており、アクセスされる方々の安全を第一に考え業務を行っており、今後も引き続きこのような態勢で、真摯にメディアの可能性を拡げていきたいと考えています。

（7） ライツ関連部門の取り組み

2009年6月の機構改革により、映画、DVDやライツ関連事業を担うライツ開発局が設置され1年あまりが経過しました。ライツ部門では、地上波放送と関連する様々な他媒体との相乗効果等をめざして、視聴者の皆様により充実したコンテンツを多様な方法でお届けしており、2010年度上半期におきましても、以下のような事業を行ってきました。

まず映画事業ですが、系列局出資として、「のだめカンタービレ 最終楽章（前編・後編）」の後編が4月に公開されました。その他にも「矢島美容室 THE MOVIE ～夢をつかまえネバダ～」 「座頭市 THE LAST」 「THE LAST MESSAGE 海猿」と合わせて4本を公開しました。

ライツ関連事業では、2010年度上半期にドラマやバラエティ、スポーツ関連などを中心としたDVD16点をリリースしました。

また出版物としては、地域の皆様に役立つ情報をお届けする目的で、平日午前に放送されている人気番組「よ〜いドン!」に関する書籍を2冊出版しました。ひとつは「となりの人間国宝さん 味街探訪〜円広志・月亭八光がゆく〜」で、視聴者の皆様にも本を片手に町を探訪していただき「となりの人間国宝さん」の世界を追体験していただけるよう、町ごとに詳しい地図も掲載しています。

もう1冊は「産地の奥さんごちそう様!こんな食べ方、あんな食べ方」で、月曜日のレギュラー企画を書籍化したもので、これまで取材しました全国の「産地の奥さん」ご自慢の、旬の素材を使った合計365点を写真とともに、一部レシピも加えて載録し、産地ならではのアイデアを凝縮、キッチンに常備して一年中使える便利な料理本となっています。

そして2010年夏、深夜のレギュラー番組「イケメンデルの法則」から生まれたユニット「ココア男。」主演のドラマ「ヘヴンズ・ロック」を制作し、若者層を中心に人気を呼んだ「ココア男。」関連商品も幅広く開発し、視聴者の皆様に提供しました。

ところで、海外への番組販売ですが、当社ではアジア各国へのドラマ販売を中心に展開しており、2010年度上半期は、8作品を5つの国と地域の放送局へ販売しました。

中でも最先端のファッショントレンドを取り入れた「リアル・クローズ」、都会の男女のおしゃれな恋物語を描いた「まっすぐな男」などが好まれました。

これまで紹介しました事業に加え、2010年度上半期には、2つの大型番組連動イベントを開催しました。

ゴールデンウィークには、「冒険チュートリアル」放送1周年を記念したイベント「冒険キッズパーク」を実施し、特番観覧、番組関連展示物の見学、食事や買い物をお楽しみいただけるブースの展開など、日ごろ番組を応援していただいている視聴者の皆様への感謝の意を込め、また特に子供たちに向けての催しとなり、来場者数は3日間で1万人を超える盛況となりました。

さらに6月には「よ〜いドン!」が放送開始2周年を迎えるのを機に、阪急百貨店にて「よ〜いドン!食覧会」を実施、タイトルの通り「食」を中心に「よ〜いドン!」でこれまで放送した関西の町々の「味」を、「本日のオススメ3」コーナーや「となりの人間国宝さん」コーナーなど、番組コーナーの特性も絡めながら出店する形で皆様に届けました。

おかげさまで約10万人という百貨店の催事としては異例の、多数のお客様が来場され、皆様には国内各地のおいしい食品の買い物を通じ“五感”で「よ〜いドン!」の世界をお楽しみいただきました。

ここまで記載しましたように、当社では映画出資・ライツ開発各分野においても、著作権その他権利関係を適切に処理し、契約書等文書作成に際しては、担当者が編成制作

業務部・コンプライアンス推進部ならびに社内弁護士と緊密な協議を重ね遺漏のないチェックを行っています。そして映画事業では社内合意について、より厳正な規程に基づき業務に取り組んでいます。

(8) 技術部門の取り組み

2010年度上半期におきましても、関西エリアの視聴者の皆様により良い放送を届けるために、デジタル化対応をはじめとする以下のような取り組みを行っています。

1) デジタル化への取り組みについて

2010年度もデジタル放送エリア拡大のため、47局の中継局（ミニサテ含む）の建設を予定しており、9月末までに兵庫県4局、京都府2局、大阪府2局、奈良県1局、和歌山県2局の合計11局を建設しました。これにより当期までに、建設しました中継局は合計109局となり、残り36局を2010年度中に設置し、総合計145局になり、近畿2府4県をカバーします。

2) 放送運行の安定化、放送事故防止対策への取り組みについて

当社では、2009年に導入した送出システムにおいて、放送運行の事前チェック、システム改修の検証、緊急編成に対する訓練を継続的に行っています。これにより放送の安定と報道特番などへのスムーズな対応を実現しています。

また、放送の送出部門と放送データ作成部門との組織的な縦割りを止め、定期的な人員交流をし、お互いの業務の理解を深めることによって放送運行の安定に寄与するとともに、各部門内においても定期的にシフト変更を行い、チームや個人の業務が特定の番組編成に偏らず、様々なシーンに接することによって経験を積めるようにしています。

さらに生駒送信所には6600Vの高圧電源があり、月に1度の目視点検を行っています。送信所内での事故防止のために全部員は関西電気安全協会の安全衛生教育を受けています。また、送信所には高圧作業用のゴム手袋やヘルメット、検電気を常備し安全対策に取り組んでいます。

3) CM運行での取り組みについて

テレビコマーシャルは、視聴者の皆様が商品を購入するにあたり、大変重要な機会を提供させていただいていると考えています。そのような中、コマーシャルメッセージを正確に視聴者の皆様に伝えるため、CMの放送事故防止に努めることは、CM部としての責務です。当社では、いち早く広告会社からのCM進行表の電子電送を導入しており、3重チェック等で放送事故防止推進に取り組んでいます。また、放送システムの更新により操作性も向上され、緊急のCM素材変更や自然災害、事件・事故で急遽編成される報道特別番組などの緊急番組変更にもスムーズに対応しています。

また、CMの考査については考査部と連携し、視聴者の皆様が不利益を被らないよう

に、適正な表現がなされているか、公序良俗に反していないかなど、テレビの常識が一般常識から外れないよう十分注意して審査作業を行っています。さまざまな業界で経営環境などが厳しい中、審査が緩みCMをはじめとするテレビ全体の媒体価値を下げるようなことを避けることが、CM部の大切な業務と考えています。

さらに、審査を迅速に進めるため、関係各部署でスムーズに情報共有ができるシステムの開発に取り組むとともに、審査情報の電子化など、環境に配慮した形を目指しています。

4) 制作技術の取り組みについて

制作技術局では、社内だけではなく社外に出て番組制作を行う事が頻繁にあります。その際一般の人や社外団体、またその施設と接する機会が多々あります。これらの作業や活動において、制作技術局ではコンプライアンス遵守と作業の安全重視を日常的な重点項目としてスタッフに徹底しています。

同時に高品質な番組制作のため技術力向上や研究・開発にも日頃より取り組んでおり、特に最近技術進歩が著しい「3D」の分野では実際に実験を行い、テレビ番組への基礎的な応用技術について研究を始めました。具体的には、各種テレビ技術セミナーにできるだけ参加し技術力の向上に努めています。

また、照明メーカーと共同で2009年より「LEDを使ったスタジオ照明器具」の開発を行っており、順調に研究開発が進み、間もなく業界内展示会で試作品が披露される見込みで、2010年度中には完成品が当社スタジオに導入される予定です。この器具の導入で、照明電力や空調電力の大幅削減が可能になり、非常に有効なエコ・省エネがはかれることとなります。

FNS系列全体の技術制作力向上のため、8月にKTV社員を鹿児島テレビに派遣。カメラ・スイッチャー業務の指導講習を行いました。また、2010年4月より関連会社からの出向を受け入れ番組制作にかかわるスタッフの制作技術力とコンプライアンスの向上に取り組んでいます。

そして、第2四半期の全国ネットドラマ「逃亡弁護士」に社員技術スタッフ（編集）を派遣し、全編にわたり編集作業に従事しました。さらにデジタルスチルカメラを使った撮影分野への研究、取り組みを始めており、10月以降、ドラマ制作で実際に応用することになっています。

また6月、当社内アリーナで開催されたプロレスリングイベントを3D収録すると同時に、社内にて同時試写を行い、3D撮影の効果や問題点を検証しました。

5) 放送設備のHD化と充実への取り組みについて

7月に天気予報画面のHD化が完成。視聴者の皆様に対して、従来より大きな画面でお天気的生活情報を視覚的にわかりやすく提供できるようになりました。また、9月に屋外中継電波の送受信システムがHD化され、基本的に中継番組はすべてHD制作が可能になりました。

6) 資格取得への取り組みについて

今期に制作技術局1名が無線従事者の資格を取得。また、放送業務局新入社員1名も有資格者である他、今後も外部スタッフを含め資格の取得を奨励していきます。

(9) 営業部門の取り組み

2010年度上半期においては、円高・株安など広告市場に影響を与える不安要素を抱えた厳しいセールス環境下での営業活動となりました。そのような状況の中で、健全な放送文化の発展に寄与するという使命を果たすべく、以下のような取り組みを行いました。

まず全国ネットの作業として、2010年度より当社の単独主催となり、装いも新たにした大型スポーツイベント「ダイヤモンドカップゴルフ2010」を社内各部署と連携して5月に開催しました。大会自体も大きな盛り上がりを見せ、無事成功裡に終えることができましたが、今年大会を通じて従来から行っているチャリティの内容を変え、JGA（財団法人 日本ゴルフ協会）が取り組んでいるジュニアゴルファーの育成や、JGTO（社団法人 日本ゴルフツアー機構）が取り組んでいる環境保護活動「はじめの第一歩！」等に対して支援金を寄贈しました。

関西ローカルでは、視聴者の皆様とより近づくための番組連動イベントを2回実施しました。一つは、ゴールデンウイーク中の5月2日～4日の3日間「冒険キッズパーク」と題して、「冒険チュートリアル」のスペシャル生番組と連動した無料イベントを本社社屋1階アトリウムで開催し、期間中の来場者は延べ1万人を超えました。会場では協賛企業のブースとともに、出演者らによるマグロの解体ショーやキッズストリートダンス大会などのエンターテインメントが盛り込まれ、優良な視聴者参加型イベントとなりました。

もう一つは、8月7、8日の2日間開催した「8・8祭り」で、上記のイベント同様、スペシャル生放送と連動した無料イベントを本社アトリウムで展開しました。体験型の協賛企業ブースや、かき氷・ヨーヨーすくいなどの縁日屋台コーナーを設け、夏休みの家族連れで大いに賑わいました。

このほか、毎年恒例の視聴者招待イベント「さわやかトーク」「親子サイエンスフェア」をそれぞれ7月と8月に開催しました。「さわやかトーク」はタレントの向井亜紀氏を講師に招き、ご自身の闘病体験から得た生き方のヒントについて講演して頂きました。また今年で3回目となる「親子サイエンスフェア」は、身近なところにある科学の不思議を解りやすく、実際に体験しながら親子で楽しく学べるイベントとして、参加応募者数が2009年の3倍になるなど、すっかり定着してきました。

営業部門としましては、今後とも収益のアップと視聴者還元という目的を、高い次元

で融合させた有意義な営業活動を押し進めていきます。

(10) イベント開催部門の取り組み

事業局では2010年上半期も 感動やお楽しみを関西地区を中心とした皆様にお届けするため、ミュージカル、演劇、コンサート等様々なイベントを開催しました。

春は新しいジャンルの博物館コレクション公開「トリノ・エジプト展」を開催しました。世界屈指の古代エジプトコレクションの初来日が大きな話題を呼び、予想を上回る多くの方々に来場していただきました。

5月には恒例のゴルフイベント「ダイヤモンドカップゴルフ 2010」を実施、6月は当社が長年取り組んできました「3000人の吹奏楽」が記念すべき50回目を迎えました。また、大阪府下・兵庫県下の私立幼稚園児6000人が一堂に集う「キンダーフェスティバル」も35回目を迎えました。このような地域に根ざしたメセナイイベントも大変重要であると考えています。

そして秋には、今年最大のイベント「大阪平成中村座」が8年ぶりに帰ってきます。大阪城西の丸庭園の芝居小屋で、天守閣を背景に繰り広げられる歌舞伎を存分に堪能して頂けるよう 江戸情緒たっぷりの中で皆様をお待ちしています。

「FNSチャリティ活動」につきましては、イベント会場での募金活動や、8月7、8日に本社アトリウムで開催された「8・8祭り」会場での募金活動を行いました。今後も引き続き活動の場を広げていきたいと思っております。

一方、コンプライアンス関連としては、リスク分担興業催事契約書の締結が進行しつつあり、イベントのホームページ、印刷物をチェックする態勢等も整備されてきました。今後も万が一にも問題が発生しないように、細心の注意を払っていくなど努力してまいります。

(11) 番組審議会の活動

放送法を典拠とする放送番組審議機関として、「関西テレビ放送番組審議会」の強化について委員会運営改善の具体策を、番組捏造問題の反省と教訓にたち、2007年に委員会提言として頂きました。当社番組審議会委員の任期は、毎年7月から翌年6月であり、2010年7月より第52期番組審議委員会を下記委員にご就任いただきました。

委員長	森下俊三	(西日本電信電話株式会社相談役)
委員長代行	瀧藤尊照	(四天王寺大学教授)
委員	飯塚浩彦	(産経新聞社大阪本社編集局長)

井上章一（国際日本文化 研究センター教授）
上村洋行（司馬遼太郎記念館 館長）
大久保育子（消費生活専門相談員）
後藤正治（作家・神戸夙川学院大学学長）
小長谷有紀（国立民俗学博物館教授）
難波功士（関西学院大学社会学部教授）
平野鷹子（弁護士）

そして、今期の番組審議会においても、2007年の提言に依って、改善策「番組審議会のあり方」を踏まえ、2010年度上半期も、以下の改善点を引き続き実践しています。

<改善策「番組審議会のあり方」>

① 審議対象番組の選定

・審議会（委員長、委員長代行）と審議会事務局が合同で行う

② 討議を活性化する

- ・オブザーバー（制作担当者）をプロデューサー以外にも拡充する
- ・オブザーバーと委員との質疑応答を随時に（従来は議事の最後）
- ・担当責任役員も当事者性に基つき発言する
- ・委員の自由発言（当月議題以外でも）を拡充する

③ 諸情報の積極的開示と共有

- ・審議内容を社内外の従前以上に積極開示する
- ・審議内容への対応諸施策を次回審議会で報告
- ・視聴者の苦情・抗議、対応状況のより詳細な報告

<放送倫理会議への伝達>

2010年度上半期においては、③審議内容の社内各制作現場への周知について、「放送倫理会議」において、審議内容を速やかに伝達し、放送倫理会議においても情報と認識の共有化を実践しました。審議会に出席している当社幹部から各々の局内への示達に加え、放送倫理会議でも周知することでより確実に現場への周知徹底が図られます。今後とも、番組審議会からの指摘や提言を、より実りある形で現場周知することに努力していきます。

また 当社社員の委員には2009年に続き 制作技術局長を加え、地上デジタル放送への完全移行を目前に、当社の課題への取り組みについて、より詳しく説明できる陣容となりました。

<2010年4月から9月の番組審議会審議実績>

第514回番組審議会（4月8日）

「高橋大輔銅メダルへの軌跡ー知られざる4年間の「道」」（3月8日放送）

第515回番組審議会（5月13日）

連続ドラマ「チーム・バチスタの栄光2 ジェネラル・ルージュの凱旋」第1話
(4月6日放送)

第516回番組審議会 (6月10日)

ザ・ドキュメント「償い -JR福知山線脱線事故から5年-」 (4月24日放送)

第517回番組審議会 (7月8日)

「世間の裏側のぞき見バラエティ ウラマヨ！」 (6月19日放送)

第518回番組審議会 (9月9日)

ザ・ドキュメント「戦争と仏教 ～「時報」が記した戦時の教え」 (8月13日放送)

第4 視聴者の皆様とのつながりやメディアリテラシー活動

(1) オンブズ・カンテレ委員会の活動について

「オンブズ・カンテレ委員会」は、2009年7月に設置された外部の有識者からなる委員会で、第三者の視点から番組などを中心に、当社に対して、広く論評、注意喚起、提言を行う組織で、従来ありました「関西テレビ活性化委員会」から名称変更したものです。

委員会は、蔵本一也委員長以下3名の委員で構成され、具体的には以下の活動を行っています。

①オンブズマン機能

視聴者情報部集約の意見、批判、苦情などを、吟味・検討し、調査を指示したり、当社に改善策を求めます。放送による人権侵害などの抗議、苦情に関しても、独立した立場で調査・検証し、当社に救済措置などの改善策を求めます。

また、放送倫理会議（前出）で扱われた内容を中心に専門家の立場から意見を述べたり、BPOなどで扱われた重要事案についても、放送の将来を見据えた委員会独自の視点で話し合います。

②内部的自由（制作者としての良心の確立）の保障について

当社の番組制作に携わる者が、放送番組基準に沿わない、良心に反する業務を命じられた場合など、事実関係を調査し、当社に対し注意喚起・改善などを求めます。

③特選賞について

独自の表彰制度を持つ意味は重要と考え、良質な番組や事業イベント等の制作を推奨する委員会として、他とは違った視点で表彰します。

2010年度上半期は4月に第4回、7月に第5回の委員会が開かれました。

1) 第4回 オンブズ・カンテレ委員会（2010年4月）

2010年4月の第4回委員会では、「オンブズ・カンテレ委員会特選賞」の受賞作品を決定し、表彰が行われました。

この「オンブズ・カンテレ委員会特選賞」は、委員が前年（2009年1月から12月）に放送された当社制作の作品（番組、および番組内企画）ならびに、イベントやその他の活動について、上述のように独自の視点で良質なものを表彰するもので、募集方法ならびに審査の経過は、以下の通りです。

1月 下旬 全役員・社員に特選賞について告知、作品等の応募受付開始

2月 月上旬 作品等応募を〆切 放送番組部門10作品、のべ15件

イベント・その他活動部門7活動、のべ8件

- 2月 中旬 上記10作品ならびに7活動を投票対象に役員・社員による第1次投票開始
- 2月 末 第1次投票の結果、放送番組部門上位5作品、イベント・その他活動部門の上位3活動が決定、第2次審査へ
- 3月 オンブズ・カンテレ委員会 全委員が、第2次審査を行う
- 4月 上旬 各委員の採点を集計

この結果、特選賞放送番組部門には、報道番組部が制作した「ザ・ドキュメント 父の国 母の国 -ある残留孤児の66年-」(2009年4月29日放送)が選ばれました。

委員からは、「中国残留孤児問題、とりわけ帰国後の自立支援がきわめて不十分だという問題は、日本の戦後の国家のあり方を考えるうえで避けて通れないテーマである。この番組は、初田さんという中国残留孤児の生きざまを通じて、日本での裁判闘争だけでなく地道な支援活動の様子に、中国現地取材などを交えて、このテーマに意欲的に取り組み、視聴者に問題を投げかけることに成功していると思う」という感想や「戦争について、考えさせられる意義深い番組である。また、国家の無策を啓発する番組であり、国家補償という観点もあり、多方面から問題点をついている。テーマの設定が非常に意義深く、魅力的。取材対象と深い信頼関係を築いた点も高く評価したい」などの講評がありました。

また、イベント、その他活動部門には、アナウンス部と宣伝部が行いました「関西テレビアナウンサー朗読会」(2009年9月6日実施)が選ばれました。この活動について委員からは、「イベント自体は、関西テレビのアナウンサーの皆さんと視聴者が、テレビを通してだけでなく、直接にふれあえる機会としてとても貴重な機会となっている。また、そのイベントを番組として放送することで、視聴者に開かれたテレビ局としての関西テレビの姿勢をイベントに参加しなかった視聴者にも伝えられている。朗読会の企画もアナウンサー自身によるもので、朗読会がアナウンス技術の向上にも役立っている。視聴者に対して関西テレビの存在を高めることに大きく寄与しているのではないか」などの講評がありました。

2) 第5回 オンブズ・カンテレ委員会(2010年7月)

第5回の委員会では委員から、一部の情報系番組を中心に視聴者から内容の誤りを指摘する意見や苦情が度々寄せられていることに対して、「内容や表現についての精査や対応に緩みがある」と指摘、「同じミスを繰り返すのは、番組担当者の情報共有が徹底されていない」などの意見が出されました。そして「今後気を緩めることなく丁寧かつ慎重に番組作りにあたって欲しい」と要望がありました。

また、放送倫理会議について、より効果的なものにするために社員等への幅広いフィードバックを検討すべきなどの意見が出されました。

このように「オンブズ・カンテレ委員会」の委員の皆様には、様々な知識・経験に基づき、第三者の視点から当社の番組制作、放送を中心とした事業活動に忌憚りの無いご意見をいただく場として活動していただいています。それは、当社にとって非常に不可欠かつ有意義なことであり、今後も当社の番組等につきまします的確なご意見やご指導をいただけるよう望んでいます。

(2) 視聴者の皆様からのお問合せ等への対応状況と「月刊カンテレ批評」

1) 視聴者の皆様からのご意見について

2010年4月から9月までの視聴者対応件数（電話・メール・郵便）については、以下の通りです。

4月	総件数6778件	(問合せ4392件 苦情898件 要望812件 感想327件 情報提供176件 その他173件)
5月	総件数5759件	(問合せ3686件 苦情733件 要望612件 感想376件 情報提供165件 その他187件)
6月	総件数6018件	(問合せ3875件 苦情830件 要望681件 感想318件 情報提供157件 その他157件)
7月	総件数6647件	(問合せ4227件 苦情970件 要望694件 感想376件 情報提供151件 その他229件)
8月	総件数5493件	(問合せ3414件 苦情791件 要望550件 感想313件 情報提供179件 その他246件)
9月	総件数6082件	(問合せ3724件 苦情934件 要望648件 感想402件 情報提供152件 その他222件)

これら視聴者情報部で受け付けました視聴者の皆様からの問い合わせ、要望、感想、苦情、情報提供等のうち、特定の番組専属「視聴者対応スタッフ」が担当しました対応件数については、以下の通りです。

「よ〜いドン!」では、2010年4月〜9月で144件

「スーパーニュースアンカー」では、2010年4月〜9月で394件

「FNNスーパーニュースアンカー」では、2010年4月〜9月で131件

また、各月のお問い合わせ等の主な内容は、次の通りです。

【4月】

韓国ドラマ「華麗なる遺産」の放送が始まり、放送日時などの問合せが200件以上ありました。5日(月)に行われたアイスショーのイベント「浅田真央&高橋大輔 凱旋SP!KTVダイヤモンド・アイス2010」の放送で、再放送希望と、放送時間が1時間だった為、ノーカット版の放送希望が、合計74件ありました。

27日(火)「プロ野球中継 中日×巨人」の放送があり、「東京ヤクルト×阪神」が荒天により中止となった為、「今日の放送はありますか？」などの問合せが118件ありました。また30日(金)「プロ野球中継 阪神×巨人」には102件以上もの電話やメールがありました。中でも、延長がないことに対するご意見が59件ありました。その他、「CMや、番組が始まってすぐに『ここまでのハイライト』が入るタイミングが悪い」などのご意見が23件ありました。

【5月】

12日(水)「スーパーニュース アンカー」“青山のニュースDEズバリ!”に101件の電話やメールがありました。そのうち、「口蹄疫の問題を取り上げてくださってありがとうございました」「感動しました」などのご意見が約半数でした。

26日(水)「よ〜いドン!」“となりの人間国宝さん 京都・烏丸御池”の本日のお土産のうな井をスタジオで頂く際、「食べ方が下品、卑しい」「食べてばかりだ」などのご意見が17件ありました。多かった問合せは、7日(金)「よ〜いドン!」“となりの人間国宝さん 京都・神宮丸太町”で訪れたタルト・タタンのお店が160件と、25日(火)「とくダネ!」“自分で治せる最新「腰痛」治療”で紹介された病院が105件ありました。

【6月】

6月2日(水)「FNN 報道特別番組 鳩山首相が辞意」の放送で「よ〜いドン!」の放送時間が変更となり、問合せが29件ありました。また、6月4日(金)「FNN 報道特別番組 首相指名選挙で菅氏を選出」の放送に伴い「真珠夫人(再)」などの放送問合せが168件ありました。

5日(土)「にじいろジーン」“地球まるごと見聞録〜今日からアナタも世界ツウ!〜”に関する問合せや苦情が、合計31件ありました。

9日(水)「スーパーニュース アンカー」“青山のニュースDEズバリ!菅新体制スタート その「本性」とは?”に82件のご意見がありました。「批判ばかりするな」「偏っている」などの意見が一番多く40件ありました。

25日(金)「踊る大捜査線(再)」初回放送の第1話が拡大版だった為、2日に分けて放送し、重複部分をご覧になった方から「昨日と同じ内容を放送してますが?」などの問合せが49件ありました。

多かった問合せは、11日(金)「よ〜いドン!」“発見!関西ワーカー(金)”で紹介された仏具クリーニング師に93件ありました。

【7月】

5日からアナログ放送の全ての番組で、上下に黒味がついたレターボックスと呼ばれる16対9の横長画面での放送が始まりました。「何で画面が小さくなってるの?」などの問合せや苦情が合わせて62件ありました。

「真珠夫人(再)」が、6月25(金)を最後に7月7日(水)から毎週水曜の深夜

に放送枠が移動した為、放送時間の問合せや苦情が136件ありました。

13日(火)に行われた「プロ野球中継 阪神×巨人」の放送有無の問合せが268件、解説・実況に関する苦情と放送の延長がない事に関する苦情が47件、合計329件ありました。

24日(土)～25日(日)「FNSの日26時間テレビ2010超笑顔パレード 絆～爆笑!お台場合宿!!～」の放送があり、タイムスケジュールの問合せが37件、「24時間駅伝」に対してや企画についてのご意見が30件、合計で137件の電話やメールがありました。

多かった問合せは、「よ～いドン!」「となりの人間国宝さん 大阪・梅田」で訪れたイタリア料理屋やカフェなどで97件ありました。

【8月】

13日(金)「スーパーニュース アンカー」“あんたがアンカー”で、アナウンサーが「東方神起は解散しちゃった」と発言したことで、「活動は休止中です」とのメール、電話の苦情が71件ありました。

65年目の終戦記念日に向けて、13日(金)「ザ・ドキュメント」“戦争と仏教 寺報が記した戦時の教え”が放送されました。戦争を思い出された方、また戦争を知らない方からも、ご意見、再放送希望など9件寄せられました。

16日(月)「スーパーニュース アンカー」“ANCHOR's EYE 食物アレルギー「ちなりちゃんの挑戦」”に「大変参考になりました」など8件の感想が寄せられました。

28日(土)「たかじん胸いっぱい」“残暑を斬り裂くガンガントーク祭り～絶対に負けられない2時間スペシャル!!～”に24件のご意見があり、そのうち橋下知事の出演と一方的な発言に対するご意見が10件ありました。

多かった問合せは、「よ～いドン!」「プロが教えるとおき 本日のオススメ3 夏真っ盛りスペシャル 2010「ご飯の友」”で紹介した商品で95件ありました。

【9月】

1日(水)急遽「FNN報道特別番組」が編成され、「マルサ!!(再)」、「GTO(再)」が休止になり、問合せや苦情などが233件ありました。

5日(日)「38th フジサンケイクラシックゴルフ」最終日のトーナメント途中で中継が終了した為に、苦情や試合結果の問合せが116件ありました。

14日(火)「逃亡弁護士」最終回に66件の電話やメールがありました。ほとんどが「素晴らしかった」「スペシャルや続編を放送してください」などの感想と要望で38件ありました。20日(月)から「よ～いドン!」のプレゼント応募方法が変わり、電話番号の問合せや発信者番号通知の方法の問合せが31件ありました。

20日(月)「HEY!HEY!HEY!」のスペシャル版が短縮放送だった為、苦情が34件あり、21日(火)放送「新・ミナミの帝王」に対しては、シリーズ化希望

や、主役が竹内力さんで無い事への苦情など、いろいろなご意見が45件ありました。

多かった問合せは、「よ〜いドン！」24日（金）発見！関西ワーカー“地コスメマイスター”のお店に110件と、3日（金）発見！関西ワーカー“美味しいフルーツを提供する フルーツコーディネート”の果物店に91件ありました。

2) ACAP 関連の活動について

現在当社は、ACAP（消費者関連専門家会議）に属しており、番組視聴者の皆様と接する業務を行う部署を中心に、ACAPの西日本支部例会に毎月出席し、交流を深めています。

今年はACAP創立30周年ということで、9月28日（火）に記念シンポジウムが大阪で行われ、消費者庁の福嶋長官から、「消費者庁創設から1年を迎えて」と題した基調講演をいただいたほか、「消費者、行政、企業間のコミュニケーションの深化を通じて安全・安心な暮らしを」と題したパネルディスカッションも行われました。

3) 「月刊カンテレ批評」について

「月刊カンテレ批評」は、毎月最終日曜日に放送している番組で、冒頭にオンブズ・カンテレ委員会の報告など、関西テレビの情報を公開する目的で「関西テレビからのお知らせ」を紹介しています。

また、いくつかの「視聴者の声」を取り上げ担当部署から回答する形を従来から行っています。

さらに、2010年度からは、番組の演出方法について是非を問う「メディア批評」コーナーを設けました。「メディア批評」では、コメンテーターの井上章一氏から「政治とテレビ」や「女性アナウンサーについて」など、毎回テーマを出していただき、批評をいただいています。

番組の最後には、番組審議会の委員の方々のご意見を紹介しています。「月刊カンテレ批評」は、当社の番組やイベントなどを自ら批評することで、より良い番組作り、そして「視聴者と心でつながるテレビ局」を目指すための一助としての機能を保っています。

(3) メディアリテラシー推進活動の現状

1) 活動全般について

当社のメディアリテラシー推進活動は、2007年に本格的な取り組みを始め、今年で4年目に入ります。この活動の推進は、全社横断の組織「心でつながるプロジェクトチーム」で行っていますが、6月に新メンバーに再編成され、新たな意気込みでスタートしています。2009年から設立されたメディアリテラシー推進部も、6月に新しい部員を加えるなど、心機一転の再スタートを切っています。

プロジェクトチームの会議は毎月1回開催されており、メンバーが活動報告や企画提案、情報交換などを行い、活動のバックボーンとなっています。具体化への調整は、メディアリテラシー推進部が担当しています。

それらの活動と並行して、メディアリテラシー番組「テレビの素」（毎月1回、通常第3日曜日午前6時30分放送）の放送も引き続き行っており、メディアリテラシーの実践活動と効果的に連携させ、成果を上げるように工夫をしています。

また、当社ホームページには、心でつながるプロジェクトチームの活動が掲載されています。

2) 出前授業について

活動当初から行ってきた「出前授業」は、青少年へのメディアリテラシー教育の一環として行っているもので、次のような活動を行いました。

まず、6月7日（月）に、寝屋川市内の中学校・3年生を対象に「テレビ局の仕事」について講義をするため講師を派遣しました。この日の講義は、キャリア教育の意味合いも強く、テレビ局全体についての仕事紹介となりました。

また、7月13日（火）には、堺市内の中学校2年生を対象に「アナウンサーの仕事」についての講義をするために、2名のアナウンサーを講師として派遣しました。

9月7日（火）には、富田林市内の中学校・2年生を対象に「報道の仕事」についての講義をするため講師を派遣しました。

9月10日（金）には、寝屋川市内の大学生を対象に「アナウンサー講座」を実施しました。

そして、9月14日（火）には、大阪市内の小学校・5年生を対象に「ニュース番組の制作体験」を行いました。簡易スタジオセットやカメラを持ち込み、アナウンサーやカメラマンなどを体験学習するという内容です。本物のカメラに触れた感動や、ニュース原稿を読むアナウンサーやキャスターの仕事に挑戦した感激などの声が多数寄せられ、子供たちのテレビ放送への関心と親しみが倍増したことと思います。

3) 制作支援活動について

2009年からスタートした新たな活動として、「中高生のための映像作品制作支援プログラム」があります。昨年に引き続き実施しているのは、近畿地区の中高生を対象にした軽音楽系クラブのコンテスト「We are Sneaker Ages」（ウィ・アー・スニーカーエイジズ）を舞台に、12月のグランプリ大会に向けて挑戦するクラブメンバーの姿を仲間が取材し、ドキュメンタリー作品を制作するという試みです。今年も、私立京都光華高校と奈良県立橿原高校の2校が参加しています。

この活動は、中高生の映像作品制作を支援する過程で、お互いのメディアリテラシーを学習するものです。高校生自ら、企画・構成を考え、撮影を行っています。来年の1月～2月に編集をして完成する予定です。

また、大阪府立阿倍野高校のパソコン部が制作する映画づくりへの制作支援も行って

います。映画制作の支援過程で、お互いに何を学ぶことができるのか、試行錯誤しながら実施しています。

その他にも、和歌山大学観光学部で制作する映像への支援なども行っています。

4) メディアリテラシーの共同研究について

メディアリテラシーの共同研究も大学生を中心に進めています。2010年度で3年目を迎えた立命館大学産業社会学部との研究では、4月から新企画でスタートし、「テレビとは何か、原点としてのテレビを考える」という研究テーマを学生達に示し、研究を行っています。それらの研究成果は、映像作品として報告することになり、後期授業では、映像制作についても具体的に講義する予定となっています。

また、2年目を迎えた関西大学社会学部との間で進められている「マスコミ制作実習」も4月から毎週、2コマの授業が設定され、長い制作現場キャリアを持つ社員やアナウンサー、そして技術の担当者らの協力のもと、授業を行っています。

5) メディアリテラシー番組「テレビの素」

メディアリテラシー活動のもうひとつの柱となっている番組「テレビの素」（通常毎月第3日曜日午前6時30分から放送）は、レギュラーのメディアリテラシー番組として他局に例を見ない番組です。

2007年10月にスタートして以来、放送回数29回、テレビ放送の現場の姿を視聴者にお伝えしてきました。

放送の仕組みやスタッフの動き、報道番組やニュース、バラエティやスポーツ番組などを取り上げ、テレビ番組がどのように作られているのかを視聴者の目線に立って、カメラはスタジオの裏の裏まで潜入し、スタッフに密着して見せてきました。

10月からは、タイトルも「テレビのミカタ」と改め、新しいアプローチで「メディアリテラシー」の広がりと可能性を追求していきたいと考えています。

2010年度に放送された内容を以下に記します。

「テレビの素」司会：ロザン 杉本なつみアナ

4月：若者のテレビ離れについて考える

5月：深夜バラエティについて

6月：ニュースの現場から ～報道支局

7月：テレビの見方と学校教育

8月：スポーツバラエティの魅力と課題

9月：バラエティ番組のロケに密着

(4) 環境対策等の活動について

当社では、コンプライアンス態勢等の構築や積極的な企業情報の開示、情報セキュリティポリシーの再構築など、CSRを常に認識して企業活動を行っています。環境対策については、2008年8月に策定した「環(カン)テレ宣言」に則り、環境負荷の少ない社会の実現に貢献する姿勢を明確にし、継続してさまざまな施策を実践していま

す。

具体的には、環境省の「CO2削減 ライトダウンキャンペーン」に賛同し、6月21日の夏至と「七夕クールアースデー」の7月7日の両日、午後8時から10時までの2時間、ネオンサインや外灯を消灯しました。

また、屋上緑化計画への取り組みとして、当社10階テラスで栽培を行っている「サツマイモ」は3年目に入りましたが、今回は新たに「ゴーヤ」を追加、ヒートアイランド対策を続けています。

さらに、飲料の自販機についてはエコ対応に順次交換し、関西初のお目見えとなったソーラー発電付き自販機「e c oる／ソーラー」を扇町公園側に設置し、自販機の夜間照明をソーラー発電でカバーしています。

(5) 会見、ホームページ等、企業情報の開示状況

現在、当社では、企業情報の開示を放送事業者の責務として捉え、社長会見をはじめ報道リリースやホームページ等で、業績、視聴率状況、番組改編情報、その他社会的に重要と思われる事項の開示に積極的に努めています。

詳細は次の通りです。

1) 社長定例記者会見

5月28日、決算取締役会後に社長定例記者会見を開催し、2010年3月期の決算概要、役員人事、それに2009年度コンプライアンスCSRレポート等を開示しました。

また、4月23日に開催されましたオンブズ・カンテレ委員会において特選賞受賞者への賞状等が授与された旨を報告しました。

8月5日には、夏季社長定例記者会見を開催し、経営状況、視聴率状況、さらに7月16日に開催された第5回オンブズ・カンテレ委員会の内容等に関して報告しました。

2) 改編記者発表

9月10日、10月改編記者発表会を開催し、編成制作局長が、火曜ドラマをはじめとする新番組の説明を行いました。

3) 報道リリース等

6月25日に開催されました株主総会終了後は、承認された議案と役員担務を各報道機関にリリースいたしました。

なお、2010年度上半期において、当社ホームページ上で発表しました企業情報等は、次の通りです。

- 4月 1日 (木)
「代表取締役社長 ご挨拶」更新
- 4月23日 (金)
オンブズ・カンテレ委員会 特選賞決定について
- 4月26日 (月)
夏ドラマ「逃亡弁護士」主演決定！
- 5月 6日 (木)
「あの日の僕に会えたら」がギャラクシー奨励賞を受賞
- 5月28日 (金)
5月28日付 コンプライアンス・CSRレポート（2009年度）
- 5月31日 (月)
平成22年3月期決算社長会見（5月28日）
- 6月 5日 (土)
「ヘヴンズ・ロック ～Heaven's Rock～」見逃し配信決定！
- 6月24日 (木)
「逃亡弁護士」見逃し配信決定！
- 6月25日 (金)
第69回定時株主総会及び「役員担務」について
- 7月22日 (木)
iPhoneで「怪談グランプリ」の見逃し配信がスタート！
- 7月27日 (火)
オンブズ・カンテレ委員会 第5回 概要
- 8月 6日 (金)
平成22年夏季社長記者会見（8月5日）
- 9月 1日 (水)
関西テレビ・フジテレビ系 火曜22時連続ドラマ
2011年1月ドラマ（タイトル未定）
- 9月17日 (金)
「関ジャニ∞のジャニ勉」9月15日放送分の訂正及びお詫び
- 9月22日 (水)
11月7日（日）に関西テレビ・本社で「オープンスクール@カンテーレ」
開催

第5 コンプライアンス態勢の構築

(1) リスクマネジメント態勢等の確立について

当社では2008年2月の五輪番組情報配信問題を受けて、当該部署の業務フローを見直すだけでは不十分と考え、同年3月26日の取締役会において、「リスクマネジメント態勢の確立に着手すること」を盛り込んだ内部統制決議の修正を決議しました。当社ではこれに基づいて、リスクの特定、評価、対処、PDCAサイクルの整備といった一連のリスクマネジメントシステムの確立に取り組んでいます。

その流れに沿って、2009年3月末に全社のリスク管理台帳並びに、リスクマップが完成し、2009年度に入りリスク管理のための組織態勢の変更や規程類の整備、さらには具体的なPDCAサイクルの構築に着手しました。

そして、態勢などを盛り込んだ「リスクマネジメント規程」を4月の取締役会で制定し、規程に基づき組織態勢を変更しました。

具体的には、役員を中心としたコンプライアンス委員会を新たに設置（従来のコンプライアンス委員会はコンプライアンス検証委員会に改称）し、その下部組織として、番組内容以外のリスクマネジメントを統括するリスクマネジメント会議と、番組内容に関するリスクを統括する放送倫理会議を設置しました。

6月には、第2回のコンプライアンス委員会が開催され、リスクマネジメントシステムの本格運用となる2010年度に向けた基盤を構築するための基本方針等を決定しました。

方針では、業務の多様化や社会構造の変化に伴うリスク要因増加に対応するため、昨年作成されたリスク管理台帳をベースとし、その見直しを含めたリスクの洗い出しに始まる全社的なPDCAサイクルの実施やリスクマネジメント会議を通じた全社への意識浸透などが含まれています。

これを受け、リスクマネジメント会議で具体策が決定され、8月にかけて「リスク管理台帳」の更新作業を通じたリスクの洗い出しを各部署で行いました。さらに9月以降、それらリスクについての対応方針を判断し、具体的な対応を行う作業に入っています。

最終的には、2010年度におきましてPDCAの最初のサイクルが効果的に循環するよう、各部のコンプライアンス責任者を中心とした全社的な意識の徹底をはかっています。

(2) 情報セキュリティ態勢について

前項のリスクマネジメント態勢の確立の一環として、当社では2009年4月「情報セキュリティ管理規程」「情報資産取扱要領」を施行し、全社で規程の実施・実行度を監査し、問題点を洗い出すと共に浸透を図る具体的施策を始めています。

そして、2年目となる2010年も事務局のコンプライアンス推進部・総務部・システム情報部が、各部署とやりとりを重ねながら各種台帳の洗い替えを実施し、より細かな管理態勢を取っています。

また、2月の社員による個人情報を含むUSBメモリー紛失事案を受け、社内のシステムと繋がっているPCなどの機器からUSBメモリー等、外部記録媒体へのデータ書き込みについて、セキュリティ上許可されたものだけを可能とする制限を実施しました。

さらに、重要ファイルについて、パスワード設定を義務化することにより、万が一紛失等の事態においても、簡単に情報流出しないような高いセキュリティレベルの態勢を実行することとなりました。

(3) コンプライアンス・ラインの運用について

当社では、社員等（社員、関係会社社員、派遣社員、業務委託社員、アルバイト等のすべての従業員、及び取引事業者の役員・社員その他の従業員）が、当社の業務に関する法令違反、社内規程違反又は企業倫理違反などのコンプライアンス違反行為等を発見した場合の内部通報制度として、2006年9月から“KTV・コンプライアンス・ライン”を定め運用しています。

この制度は、内部通報及び相談の窓口を社内（内部監査が担当）および社外（外部の法律事務所に委託）に設置し、適切な処理の仕組みを定めることにより、当社のコンプライアンス体制を強化し、もって、放送事業者として社会からの信頼・期待に応えることを目的とするものです。

2010年9月末で、制度開始からちょうど4年になりますが、この間にあわせて14件の通報が寄せられており、調査を行ったものが10件、そのうちコンプライアンス違反と認定されたものは5件です。

第6 経営機構等について

(1) 機構改革と改革推進本部の状況について

2010年度夏の機構改革では意志決定の更なるスピードアップをめざし、部の廃止と業務移管により組織をスリム化いたしました。具体的には企業広報部を廃止し、コンプライアンス推進局に企業広報担当部長を設置しました。

また、ライツ開発局、メディア戦略局および事業局で管理業務を担っていた業務部を廃止し、それぞれの局に管理担当者を配置しました。いずれも、組織内の垣根を少なくしスピーディーで有機的な業務遂行を進めていくためです。

そして、番組のライツ、メディア展開の更なる強化をめざし、東京コンテンツセンターにコンテンツ業務推進部を新設。センター内の予算実績を一元的に集約・管理し本社と連携しながらライツ、メディア横断的なコンテンツ制作に迅速に対応する体制を担います。コンテンツ業務推進部では、あわせて著作権・法務の一次窓口として、センター各部の様々な権利案件に対応し東京市場でのビジネスの深化を目指しています。

さらに、今回、東京コンテンツセンターには調整担当部長と宣伝担当部長を新設しました。映画事業を含むコンテンツ制作とライツ・メディア展開の中心は東京であり、調整担当部長を置くことで、より現場に近いポジションで各分野の連絡調整を行います。同様に東京制作のコンテンツは全国ネット番組が多く、そのプロモーション業務は重要かつ高度な判断が求められるため、宣伝担当部長にその任を委ねています。

一方、2009年6月に立ち上げた改革推進本部に設置した3つのプロジェクトチームはそれぞれ「コンテンツ戦略」「財務体質強化」「業務改善」に関する提言をとりまとめ、改革に具体的に取り組んできました。そして今般、この1年間の成果や取り組んできた方向性を踏まえ、課題やミッションをより絞り込んだ形で3つのプロジェクトの組み替えを行いました。

従来の「コンテンツ戦略プロジェクト」を「地上波ビジネスモデル強化プロジェクト」に、「業務改善プロジェクト」を「人材育成活性化プロジェクト」に、そして「財務体質強化プロジェクト」を「収支構造強化プロジェクト」に改組し人材力、コンテンツ力、収益力をより高めるための方策を積極的に推し進めていきます。

(2) 関係会社とグループ政策について

現在、関西テレビグループは、当社ならびに番組制作会社など8社の子会社からなる計9社の企業グループとして、事業活動を行っています。

そしてグループ一体経営の実現へ向け「グループ全体としての制作力強化」「グループ全体最適を追求した業務運営」等を重点戦略に掲げ、必要な施策を実行しています。

2010年上半期には、ITを中心とするグループ経営基盤強化を目的とし、2009年度、完全子会社化したソフトウェア開発やシステム運用・保守を主たる業務とする子会社と、初の試みとして、外部コンサルティングを交えたプロジェクトチームを立ち上げました。

また2010年度税制改正では、企業実態を踏まえグループ法人税制が見直されました。当社グループでは、既に2011年3月期から連結納税制度を適用するために、2009年9月に承認申請を済ませています。この8月には「連結納税システム」の導入も完了しました。

第7 放送人倫理の確立に向けた 教育・研修等

1)社内研修

当社では、2007年制定した「関西テレビ倫理・行動憲章」をベースに、全社員の放送人としての倫理の確立に向けた様々な社内研修を続けています。

2010年度上半期は、4月に入社した社員に対し、まる1日にわたるコンプライアンス研修を行いました。この研修ではまず、当社が3年前に起こした捏造問題について、その経緯や調査委員会から指摘された事項、さらにはそれ以降現在に至るまでの再生の道筋などを時系列に沿って理解を深めさせました。

その他、個人情報保護法施行から5年となる区切りで、再びその重要性を認識するよう関係部署に所属する社員を中心に研修会を行いました。

2)放送倫理・コンプライアンス研修会

2007年から、外部講師を招聘し講演と意見交換を行う「放送倫理・コンプライアンス研修会」と名づけた定期的な研修を行っており、2010年度に入ってから引続き、講師をお招きして研修会を開催しています。

4月14日には、「あるある問題」から3年が経過したこの機会に、改めて企業にとっての不祥事を考えるといったテーマで、同志社大学法科大学院兼任教授で弁護士の山口利昭氏に講演をお願いしました。

山口氏は、内部統制システム構築、企業会計関連、コンプライアンス体制整備、独立第三者委員会委員、内部通報制度における外部窓口業務など幅広い企業法務に携わっておられ、それらに関連する知識を得ることができました。

研修会の参加者は50人を超え、業務等の都合で参加できない者のために、社内のLANシステムに音声データや講演詳細を公開して、随時内容を確認できるようにするとともに、支社等に向けてDVDを作成しています。

2010年度の研修会は、放送倫理に関連する分野はもとより、複雑化する業務について、より実務的な知識や情報を身につけることのできる場としての役割も果たせるよう、今後も引続き様々な分野の識者の方々を招いて、社員の倫理観の向上や、業務におけるスキルアップをはかっていきます。

第8 おわりに

政権交代後の政治情勢、為替や株を巡る経済問題、それにますます緊迫化する国際情勢等、日本の企業を取り巻く環境は、依然として不安定な状態が続いています。

放送業界においても、ここ数年放送収入が伸び悩む中で、通信との新しい連携システムの構築や地上波放送の完全デジタル化も間もなく始まろうとしています。

当社は、これまでに述べてきましたように、放送事業者として克服すべき様々な構造転換を実施し、今後も新たな収入源を模索し売上の増加を目指す一方で、資源配分を再検討し、持てる力を放送に集中させていきます。

また、役員・社員の一人ひとりが放送人として高い志を持ち、これまでも増して高度な専門性を身につけ、より信頼性の高い、社会に不可欠な公共的役割を担い続けるべく努めていきます。

放送番組の質の維持向上や、視聴者の皆様に喜んでいただけるサービスの提供という命題は、いかに不況といえども疎かにすることはできません。そのためにも「エリアで最も必要とされる“コンテンツ・メーカー”」「ライフラインとして信頼されるテレビ局」をめざし、今後も全社一丸となって事業を運営していきます。

視聴者の皆様には、当社の役員・社員の行動ならびに活動をご理解いただき、今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願いいたします。